

卓球の国内トップ、日本リーグに迫る実力を持つ岐阜信用金庫。選手全員が職員として働きながら少ない練習時間を生かし、毎夏の全日本実業団選手権で男子は昨年まで4年連続で16強入りしている。悲願のベスト8入りを目指し、レベルアップに励んでいる。
(山本貴史)



多くの大会で優勝経験を持つ岐阜信用金庫。来年の全日本実業団選手権でベスト8を狙う。岐阜信用金庫梅林支店

岐阜信金卓球部 「過去最強」へ

目指すは全日本実業団8強

全員が職員、効率練習で成果

率いるのは自身も同部で活躍し、就任8年目の奥田和弘監督。選手9人のうち8人が県出身者で奥田監督がスカウトしてきた。ほとんどが高校、大学で全国大会の入賞経験があり、奥田監督も「大学までの経歴は日本リーグの選手と遜色ない」と話す。練習は週3日、支店勤務後2時間だけだが、短時間で効率よく強化に取り組む。



エースの安藤康寛。
来年1月の全日本選手権ではダブルスでの上位進出を狙う

男子のエースはぎふ清流国体3位の成年男子メンバーで、全日本社会人選手権ダブルス3位の実績を持つ安藤康寛。シェークハンドで、フットワークの良さと高い技術が持ち味。「練習量が限られている中で、試合ではリスクの低いプレーを心掛けるようになった」と言い、頭を使った卓球で逆に相手にリスクの高い攻撃を仕掛けさせる展開が得意。来年1月には全日本選手権のダブルスが控えており「相手が強いほど自分も楽しい性格。出るからには過去最高の活躍を誓った」。

岐阜信用金庫は、地元の大学を招いて練習会を開いたり、選手が県大会の審判、研修会の講師を務めるなど県の競技力向上にも寄与している。奥田監督は「卓球をやらせてもらっているという気持ちを忘れずに、仕事と両立して良い結果を残していきたい」と今後の活躍を誓った。